

草原の小さな隣人、カヤネズミの生態と保全

文・写真

畠佐代子(全国カヤネズミ・

ネットワーケ代表)



写真-1 カヤネズミ (撮影: 渡邊健也)

はじめに

カヤネズミの生態研究と保護活動に取り組んで28年目になりました。大学院の修士課程で彼らと出会って以来、これほど長くつきあうことになるとは思っていませんでした。現在ふたつの大学で講義を行っていますが、学生のほとんどがカヤネズミを知りません。どちらの大学も、すぐそばにいらしているのですが…。まして、大都会の大阪市を流れる淀川にカヤネズミが生息しているなんて、ほとんどの人が知らないでしょう。そんな、身近な野生動物なのにまだまだ知られていないカヤネズミについて、私自身のこれまでの研究でわかったことや、生息地保全の取り組みについて紹介します。

カヤ原にすむ、
日本で一番小さいネズミ

カヤネズミは、河川敷や田んぼまわりの草地にすむ、日本で一番小さなネズミです。学名の *Micromys minutus* は「小さい、小さいネズミ」という意味です。体の大きさは親指大(約6cm)、体重は500円玉1枚分(7~8g)しかありません。とても小さく軽いので、バッタのように草

の上に乗ることができます(写真-1)。毛色はいわゆる「ネズミ色」ではなく、背中や足の毛はオレンジがかつた明るい茶色、おなかの毛は真っ白です。ネズミにしてはやや丸顔で、耳は小さく、顔の横に沿うようについています。尾は長く(約7cm)、草の茎や葉にくるんと巻きつけて体を支えられます。後足の指は長く、ものをつかむことができます。こうした体の作りは、食事や移動、休息など、不安定な草の上で生活するのに適しています。

カヤネズミがすむ草地には、オギやススキなどの背の高いイネ科植物がたくさん生えています(写真-2)。これらの植物はまとめて「カヤ」と呼ばれます。カヤがたくさん生えている草原(カヤ原)にすむネズミなので、カヤネズミというわけです。食べ物は、エノコログサなどの小さな草の種や、バッタなどの昆虫です。天敵は多く、アオダイショウなどのヘビ類や、モズやコミズクなどの小型猛禽類、カラス、イタチ、ネコなど、さまざまな生き物に狙われます。

じつは研究を始めるまで、カヤネズミのことはほとんど知りませんでした。けれど彼らと出会い、その小



写真-2 オギの草原 (京都市桂川河川敷)



写真-3 カヤネズミの巣

ささとかわいらしさにすっかり心を奪われてしまいました。大人のカヤネズミは用心深く、出会うことは滅多にありませんが、子どもはとて好奇心旺盛です。産まれたての子は赤裸で小指の爪くらいの大きさですが、生後10日も経つとすっかり毛が生え、目も開いて、私が近づくと「なんだなんだ」と、巣穴から代わるがわる顔を出してきます。その様子は何とも言えないかわいらしさです。そしてさらに魅力的だったのは、彼らが作る巣の精巧さでした。

カヤネズミは春から秋に、イネ科やカヤツリグサ科の植物の葉で巣を作ります。巣材に使われる植物のほとんどはイネ科で、特にオギやスキを好んで使います。イネ科やカヤツリグサ科の植物は葉脈が平行で(並行脈)、葉をひっぱると縦にすつと割けます。カヤネズミはこの性質を利用して、前足と歯を使って葉を細く割き、何枚も絡め合わせて、球状に巣を編みます(写真-3)。茎についたまま葉を編むので、巣は周りの植物に溶け込んで、うまくカムフラージュされます。休息用の巣はこれで完成ですが、子育て用の巣はさらに巣内に葉を運び入れ、細かく裂いてふかふかにします。完成した巣は、小さなネズミが作ったとは思えないほどしっかりしています。彼ら

は本能に従い、この精巧な巣をたった一晩で作ります。できたての巣は緑の玉のように美しく、見つけるとわくわくします。作られてから日が経つにつれ巣は茶色くなり、多くは1~2か月で崩れます。そのため、彼らはイネ科植物が成長する春から秋のあいだ、ずっと巣を作り続けます。冬は地上に降りて枯草の中や、ほかのネズミやモグラが掘ったトンネルにもぐって越冬します。

稲作との関わり

夏に田んぼの中干し(田の水を一時的に抜いて乾かすこと)が行われる頃、カヤネズミはまわりの草むらから田んぼに入って巣を作ります。そして稲刈りで田んぼを追われ、また草むらにもどっていきます。田んぼでくらすカヤネズミは、なかなかゆくりすごすことはできないのかも知れません。

カヤネズミがイネを食い荒らすのではないかと心配する人もいます。ただ私自身は、カヤネズミがイネを食い荒らしている様子は見たことがなく、ずっと疑問でした。そこで、カヤネズミのフンに含まれるDNAから、実際に食べたものを調べることにしました。2015年6~11月に、滋賀県彦根市の水田地帯を歩いて巣を探し、巣内に残されたフンの中

| | 田んぼの巣 | 休耕田の巣 |
|---------------|-------|-------|
| イネ | 0 | 1 |
| イヌビエ | 6 | 2 |
| スズメノヒエ | 7 | 14 |
| オンブバッタ | 1 | 0 |
| ショウリヨウバッタ | 0 | 0 |
| コバネイナゴ | 0 | 0 |
| DNAテストに用いた巣の数 | 11 | 18 |

表-1 カヤネズミの巣が見つかった場所と、食べ物の種類(数字は巣の数)

に、イネ、イヌビエ、スズメノヒエ、オンブバッタ、ショウリヨウバッタ、コバネイナゴのDNAが入っているかを調べました。イヌビエとスズメノヒエは、どちらも田んぼの中で増えるため、農家の方に嫌われる代表的な水田雑草です。バッタやイナゴの仲間は、イネや野菜の葉を食害する昆虫です。分析の結果、多くの巣のフンからイヌビエとスズメノヒエのDNAが見つかりました。イネのDNAが見つかったのは、休耕田の巣1個だけでした(表-1)。この巣は、イネ刈りが終わったあとに作られたものだったので、おそらく落穂かひこばえを食べたのでしょう。これらのことから、カヤネズミはイネよりも、イネの害になるスズメノヒエやイヌビエをよく食べており、イネを食害することはほとんどないことがわかりました。

新潟県黒川村(現胎内市)では、かつて田んぼに作られたカヤネズミの巣を「たます」と呼び、豊作のしるしとして神棚にお供えする風習がありました。また福井県織田町(現越前町)でも、「カヤネズミが巣を作った田んぼは豊作」という言い伝えがありました。昔の人は、カヤネズミがイネの害になる植物や虫を食べてくれることを知っていたのかも知れません。

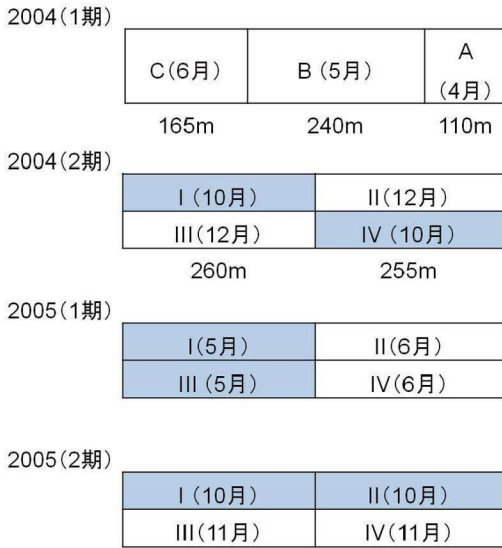


図-1 刈り取り区画の配置
A～C、I～IVは刈り取り区画。カッコは刈り取りを行った月。

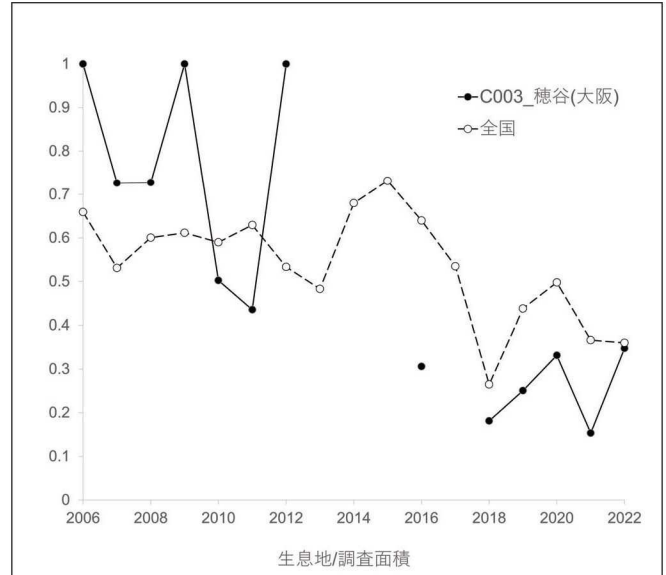


図-2 調査面積に対するカヤネズミの生息地面積の割合
実線は穂谷、点線は全国の調査サイトの平均値。
モニ1000里地調査の穂谷カヤネズミ調査結果から畠作成。
穂谷での2013～2015年および2017年の調査は行われていない。

カヤネズミの現状

かつてカヤネズミは、河原や田んぼ周りの草むらで普通に見られたネズミでした。しかし開発や河川の改修工事で生息地が減少し、さらに外来植物やツル植物などがはびこって生息環境が悪化したことで、数がとても減ってしまいました。現在、生息域の8割(1都2府28県)のレッドデータブックに掲載され、大阪府では準絶滅危惧種に選定されています。人の身近な環境にすむカヤネズミは、人間活動の影響を受けやすいのです。

私が最初にカヤネズミの親子を観察した小さなカヤ原は、開発の残土に埋もれてしまいました。次に見つけた堤防の草地は、草刈りで巣が全滅しました。たった1年で2つの調査地を失った私は、野生動物の生息地がいとも簡単になくなっていくことに強いショックを受け、彼らが安心して暮らせる環境を守りたいという思いを強くしました。この喪失体験が私の保全活動の原点となり、後のカヤネット設立へつながりました。

共存のためのちょっとした工夫

一級河川の堤防は、安全点検のため、春と秋に法面の草が刈られます。大型の除草車で一気に草を刈るので、逃げ遅れたカヤネズミが機械に巻き込まれて命を落とすこともあります。運良く逃げられても、草が刈られた場所では巣が作れないので、子育てに大きな影響がでます。しかし堤防は人の暮らしを守るためのものなので、草刈りをしないわけにはいきません。堤防の草刈りで調査地の巣が全滅して以来、私は草刈りとカヤネズミの生息地保全を両立できないかずっと考えていました。そんな時、当時大阪府立大学におられた夏原由博先生と、カヤネズミに配慮した堤防の草刈りの方法を調べることになりました。

私は「堤防に草地を残しながら草を刈れば、その場所がカヤネズミの避難場所になるだろう」と予測を立てました。まず堤防を管理する国土交通省淀川河川事務所に行き「春と秋の草刈りの際、一度に全部

刈らずに、日をずらして何回かに分けて刈って貰えませんか」と相談しました。草刈りの回数を相談したのは、この研究がうまくいったら、新しい草刈りの方法として採用して貰いたかったからです。そのために、河川事務所が協力できるやり方で草刈り実験をする必要がありました。相談の結果、春と秋にそれぞれ2～3回に分けて草刈りをしてもらえることになりました。

淀川河川事務所の協力を得て、2004年と2005年の2年間、木津川の堤防の500m×20mの範囲を2～3区画に分けて、順番に草を刈りました(図-1)。すると、カヤネズミは堤防上に刈り残された草地に避難して巣を作り、刈り取った場所の草が伸びてくると、今度はそちらに移動して巣を作りました。そしてどちらの年も、草を一度に全部刈っていた年と比べて巣の数が増えました。特に春の草刈りを3回にわけに行った2004年は、前年(2003年)と比べて約7倍(268個)にも巣が増えました。この結果をもと

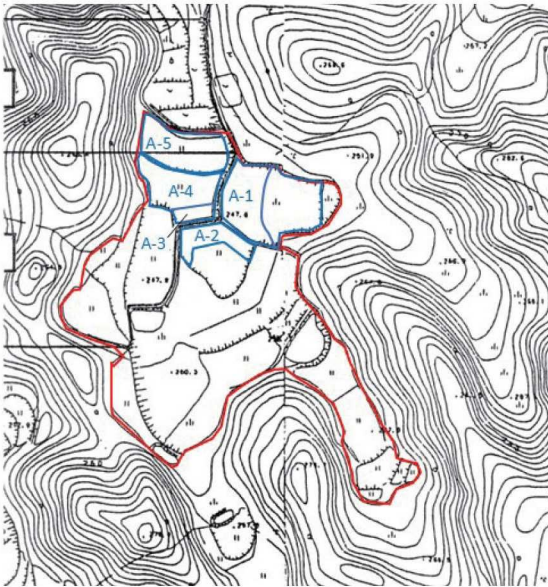


図-3 穂谷のカヤネズミ調査地
A1～A5はモニタリングサイト1000里地調査におけるカヤネズミ調査区画名。



写真-4 休耕田の草刈りと樹木の伐採の様子(枚方市穂谷)

に、カヤネズミに影響の少ない堤防の草刈りの方法をまとめて淀川河川事務所に伝えたところ、管轄の全ての出張所にも伝えてくれました。この堤防では、今でも春と秋に2回に分けて堤防の草刈りがされ、カヤネズミの良い生息環境が保たれています。

穂谷でのオギ原復活の取り組み

枚方市の穂谷では、2006年からモニタリングサイト1000里地調査の一環で、カヤネズミ調査が行われています。穂谷では年々休耕田の遷移が進み、カヤネズミが生息できるカヤ原が減り続けています。調査地のカヤネズミの生息面積(巣が見つかった調査区画の草地の合計面積)は、2006年には3635㎡でしたが、2022年には2656㎡に減少しました。調査面積に対する生息地面積の割合も徐々に減り、近年は全国平均を下回っています(図-2)。

そこで穂谷のカヤネズミの生息地を増やすために、2024年度から3年計画でオギ原を増やす取り組み

を始めました。2024年9月と11月に、調査区画(図-3)のA2とA3に繁茂したガマやセイタカアワダチソウの刈り取りと、ヤナギ類の伐採を行いました(写真-4)。A3の湿地は、オギが生育するには水位が高すぎるため、周囲に溝を掘って排水を促しました。2025年2月には、A3にオギの株を移植しました。今後、オギの生育状態を見ながら、草刈りの時期やオギの株の移植の追加を検討していきたいと考えています。

おわりに

野生動物の生息地を守るといふと、どこか遠い場所の出来事のように

感じたり、とても大変なことに思えるかもしれません。でも、たとえば「草を一度に全部刈らずに、何回かに分けて刈る」というちょっとした配慮で、カヤネズミと人の両方の暮らしを守れます。みんなが「野生動物にちょっとだけゆるぎ」気持ちをもつことが、身近な野生動物と人との共存につながります。河原や田んぼに行く機会があれば、草むらに丸い草の巣がないか、ちょっと目を向けてみてください。たくさんの人がカヤネズミやカヤ原を好きになって、これからもずっと、カヤネズミが元気にくらせる草原が残されることを願ってやみません。

もっとカヤネズミのことを知りたい人のために

『カヤネズミの本ーカヤネズミ博士のフィールドワーク報告』(島佐代子、世界思想社、2014年)

『すぐそこに、カヤネズミ: 身近にみえる野生動物を守る方法』(くもんジュニアサイエンス) (島佐代子、くもん出版、2015年)

「知ってる? 田んぼのカヤネズミの暮らし」(島佐代子、2016年)

https://www.usp.ac.jp/user/filer_public/1f/a0/1fa06b80-61b3-4989-803e-f410649567ff/ses20160613.pdf